The Fisherman's Spirit.

Iターン漁業者希望の人へ

有限会社　共幸水産
代表取締役　平木　操さん

「夢」と「覚悟」をもって来てほしい！

人不足から休漁するまき網船団が出てきて、これは何とかしなければ！　と行政（町）・漁協・地元水産会社数社が金を出し合い、中央の新聞と就職情報誌に「漁師になってみませんか」とIターン漁業者の募集広告を出したのが10年前。田舎暮らしへの憧れかどうか、我々の予想を超える大反響だった。当時、就職難もあってか大学生も多く応募してきたものだ。冷やかし半分の者も多数いたが、あれから10年、西ノ島に100人ぐらいが渡って来た。定着率は3～4割だが、しかし、Iターン漁師は確実に育ち安定してきた。

Iターン漁業者を受け入れる以前には、人不足対策として九州などから漁師経験者を雇っていたが、3～4カ月で帰ってしまう。早いのは来たと思ったら放り投げてしまう。いわゆるプロには出稼ぎ根性の甘えと変なプライドみたいなものが感じられた。だから今、出稼ぎは一切認めていない。西ノ島に来るのであれば、住所を必ず移してもらっている。ここで腰を据えて仕事をし、生活し、骨を埋める覚悟を持って来てほしい。

だから、Iターン漁業者希望の面談では、ハードルを高くしている。妻帯者であれば奥さんの、独身で婚約者がいれば彼女の、同意が必ず必要。また、離島で生活することになるので、生活環境の厳しさをことさら強調して説明する。それでも「やりたい！チャレンジしたい！」という意気込みを持って飛び込んで来る者ものだけを採用している。正直言って、漁業経験者より素人Iターン者の方が、育てるのに時間がかかっても意気込みが違うように思う。さらに、年齢的にも、39歳でIターンして7年目の現在、本人の努力の賜物で本船の機関長をやっている者もいるが、本当は20歳ぐらいから仕事を仕込むのが理想だろう。

まき網漁船は組織で動くもの。今、地元プラスIターン漁業者の混成部隊が非常にうまく機能し成果を上げているのが嬉しい。Iターン漁業者の採用で会社が変わったようにも思う。人手が安定したこともあるが、「新しい血」が入り、古参の地元の漁師とIターン者がうまく噛み合ってより活気が出てきた。

最後にIターン漁業者希望の人に一言。「夢」をもって来てほしい。しかし同時に、「並々ならぬ覚悟」を胸に秘めて。そうすれば、仲間も島の人も必ずあなた方を温かく迎えるであろう。

Interview

Iターン漁師の妻として

島根県　隠岐・西ノ島町
林　奈緒美さん

都会では味わえない生活に満足しています。

神奈川県横須賀市で生まれ育った主人が、以前から海が好きなのは知っていました。でも、まさか本気で漁師になるとは思いもしませんでした。8年前の初夏のある日、「一緒に来てくれ」と連れて行かれたのが東京・池袋サンシャイン。就職情報誌でたまたま主人が目にした西ノ島Iターン漁師募集の面接会場だったのです。私はしばらく状況が把握できないまま面接の方の話しを聞いていましたが、「何もない、すごい田舎ですよ」の言葉に不安がひろがりました。日にちをおかず体験で西ノ島へ。そしたら病院はある、スーパーストアもあるので、脅かされていた分、逆に「なんだ、なんでもあるじゃない。これなら大丈夫」とホッとして家族全員、主人の「最後のわがまま」に〝付き合う〟ことになったのです。

当時小学5年生の長男、同4年生の長女、3歳前の二男の5人家族。家財道具も増えていた時でしたが、最低限生活に必要な物だけに整理しての引っ越しでした。当初は、知り合いはもちろんいなく、寂しい思いもしましたが、子どもの保護者同士のつながりから愚痴を言える友達もできるようになり、また、自分から地域の人たちの中に入っていくようにしたりして、今では「田舎暮らし」を楽しんでいます。子どもたちにしても自然豊かな隠岐での遊びや都会では味わえない体験に満足しています。多分、横須賀にいたころよりも親子の距離感はグンと縮まったんじゃないでしょうか。

西ノ島に来て8年。一昨年暮れには念願だった一戸建ての家を建てることができました。休みの日とか何かあれば仲間の漁師さんの溜まり場となっています。長男（18歳）も昨年から、主人とは別な会社の船ですが、漁師の卵となりました。主人の「あの時の決断」は間違っていなかったと、今、思います。

新築のマイホームデッキでご主人と▶